事　業　名　野島（のじま）断層保存施設整備事業

（兵庫県南部地震の震源断層である「野島断層」を保存・展示し、阪神・淡路大震災の事実、教訓を“生きた教材”として、次世代に伝える保存施設の整備事業）

受賞機関　兵庫県企業庁都市整備局新都市整備課
兵庫県企業庁淡路建設局

事業実施期間　平成9年6月12日～平成10年3月25日

事業費　1,830百万円

技術等の特徴と評価

「生きた教材」を次世代に伝えることによって、地震や活断層への社会的関心を深め、防災教育への大きな効果が期待される。また、保存施設は断層が動いても屋根が落下したり、建物の基礎が壊れることのないような構造としている。

事業の概要と効果

阪神・淡路大震災は、大都市を襲った直下型地震であり、土木構造物を始めとする都市インフラにも甚大な被害をもたらし、活断層に対する知識、対応の再検討を迫ったと言える。

野島断層は、本震災の引き金となった断層であり、大地のズレが約10kmにわたって地表に現れたものであり、学術研究上も貴重であり、地震学者からも強く保存が望まれた。当該地区は、その中でも特に学術的に貴重な地形変化が現れた部分であり、風化が進むなか、早期の保存策が望まれ、本事業に着手した。

建物については、断層の覆蓋部に鉛・ステンレス複合板の折版葦を採用し、工期の短縮を図った。また、断層は現況のまま保存するため、断層を切る基礎梁を設けず、活断層の活動周期から、建物の寿命期間中に再度動く可能性は少ないが、断層が動いた場合（水平約1m：垂直0.5mの逆断層で、断層の両側に開く方向のズレはない）でも人命を守る（屋根の落下防止）架構とした。具体的には、柱からの片持梁の接合部において屋根落下防止につなぎ梁を設けることにより、水平方向、垂直方向にズレが生じた場合でも、屋根梁の接合部分のみ壊れるが、つなぎ梁が片持梁に引っかかり、屋根が落下することはない。

見学者でにぎわう施設

地表に現れた野島断層

阪神・淡路大震災の「生きた教材」とも言える野島断層のうち、当該地区では、主断層と分岐断層（副断層）、断層乗り越える部分に現れた左雁行亀裂帯、直線的な低断層崖など多種類の断層による地形変化があり、それぞれが明瞭に地表に現れているため断層運動を研究するうえで貴重な資料であり、「野島断層保存検討委員会」（平成7年11月設置：委員長　松田　時彦　西南大学文学部教授〔東京大学名誉教授〕）から保存を強く望まれた。さらに当該断層を後世に永く残していくため天然記念物指定の申請を文化庁に行った。

断層を保存し、展示することは、学術的意義のみならず、一般の人々にも地震断層を強く印象づけ、防災教育を進めるうえで社会的にも必要性が高い。

なお、震災で大きな打撃を受けた地元としても、明石海峡大橋開通を契機に、本施設を多くの人々が訪れることにより交流が促進され、地域の活性化を期待している。

受賞賛助会員　㈱フジタ神戸支店